



きょうようときょういくのままに ⑬

## インストラクショナルデザイン <そだねー>

東京学芸大学名誉教授 篠原文陽児

「そだねー」。この言葉、特別な思いもあり、見るたび聞きたび、あのオリンピックの、あの氷上の、あの選手たちの映像が、鮮やかに思い出される。

「そだねー」は、北海道の方言だというネットの記事。印刷された地方紙で確かめるよう向きで、大学と近隣の図書館にいくべく、足を運んだ。

結果?……残念!これら2つの図書館では、目的の地方紙を、直接、手と目にはできずじまい。しかし、いずれの図書館でも、図書、雑誌、視聴覚資料等の所在情報の検索と、借受けや複写のサービスができるとの、窓口担当者の弁。個々のサービスと利用に関する基本的な説明を聞いた後、検索は自宅でもと。いずれのサービスも丁寧に断りし、辞す。それにしても、専門性に敬服するサービスの充実。加えて、ネットで接続された関連施設と多種多様なデータベース等情報の有り様。今さらながらの驚き。余韻覚めやらぬ3月24日午後、図書館で聞いたように、自宅のインターネットで、北海道新聞社にアクセス。「そだねー」で検索。16件、ヒット!その一つ、2月21日の記事。「そだねー」は「そだね」を短縮した北海道や東北などの方言とのこと。足と目と耳、そしてネットによる知識の収集と整理、さらに組み合わせでの本稿での利用。

「そだねー」、あるいは、「そだね」は、視聴覚教育を源流の一つとする教育学の授業設計やインストラクショナルデザインにあたって、一度たりとも忘れてはいけない、特別に重要で思いのある言葉。授業や学習は、教師あるいは指導者による口頭の、あるいは、画像や音声を組み合わせた電子メディアの画面を通じた、情報の提示と応答

の連続。中でも、応答は、瞬時の診断と評価と即時のフィードバックから成り、前者に「そだね」を含むべきが、筆者の持論。応答の基本は、まず受け止め、受け容れ、褒めること。つまり、「そだねー」「そだね」いずれも、自身も相手も、確認をともなう安心感と共感を満たす魔法の言葉。しかも、間髪をいれず、「うん、そだね」と応答すれば、ポジティブなリズムが相互の信頼感をいっそう高め、コミュニケーションを円滑にし、自信と主体性をともなう科学的探究の学習等に意欲向上が期待できる。

褒めちぎる自動車教習で、検定の合格率、アップ。成人対象の実験研究では、運動技能の習得をより上手に促すため褒めることが効果的との報告も。一方、意欲、やる気と言えば、よく知られたストロークの法則。褒めたり抱きしめたりと相手を認めること、「ストローク」はやる気を起こし、家庭や職場の雰囲気活性化する。どんどん褒めると。

さて、大学図書館といえば、平成30年1月、文部科学省は、アクティブ・ラーニングに資する環境整備を視野に入れた大学図書館の先進的な取組事例、平成29年版をホームページに掲載した。人工知能研究とのコラボレーションの実現スペースの開発、2万枚に及ぶSPレコードと蓄音機の保存と活用にかかるクラウドファンディングの取組など、4件の事例である。

メディアの宝庫。知識基盤社会をけん引する施設として、視聴覚教育をいっそう確かにする中核拠点であり続ける図書館。グローバルに、地域と家庭に、新旧へのスコープに裏打ちされたチャレンジと革新に、足が、目が、耳が、離せない。